

日本 18 世紀学会 第 45 回全国大会レジュメ集

2023 年 6 月 17 日 (土)・18 日 (日)

東京大学 (本郷キャンパス)

〒113-8654 東京都文京区本郷 7-3-1

東京大学（本郷キャンパス）へのアクセス（詳細は下記リンクをご覧ください）

https://www.u-tokyo.ac.jp/ja/about/campus-guide/map01_02.html

最寄り駅からのアクセス

本郷三丁目駅（地下鉄丸の内線）より徒歩 8 分

本郷三丁目駅（地下鉄大江戸線）より徒歩 6 分

湯島駅又は根津駅（地下鉄千代田線）より徒歩 8 分

東大前駅（地下鉄南北線）より徒歩 1 分

春日駅（地下鉄三田線）より徒歩 10 分

会場へのアクセス（詳細は下記地図をご覧ください）

東京大学 国際学術総合研究棟内 文学部 3 番大教室（国際学術総合研究棟 1F）

本郷地区キャンパス 国際学術総合研究棟

[▶▶ 本郷地区アクセスマップ](#)



日本 18 世紀学会 第 45 回全国大会スケジュール

(* オンライン配信については事務局からの別途案内をご参照ください。)

6 月 17 日 (土)

- 10:00-10:10 開会挨拶 逸見 龍生 (代表幹事・新潟大学)
- 10:10-11:00 自由論題報告 (1) 貝原 伴寛 (日本学術振興会特別研究員 (PD))
「博物学者の猫論争—長い 18 世紀のフランスにおける動物・感情・文明—」
司会：坂倉 裕治 (早稲田大学)
- 11:00-11:10 休憩
- 11:10-12:00 自由論題報告 (2) 源川 まり子 (慶應義塾大学大学院)
「「聞き手」としてのルソー—『エミール』第 5 篇における対話の問題—」
司会：菅原 百合絵 (京都大学)
- 12:00-13:30 昼食・幹事会 (ただし 13:00-13:30 は新幹事会)
- 13:30-15:20 学会企画 【* オンライン配信あり。】
「啓蒙を書く、啓蒙を編む」——『啓蒙思想の百科事典』刊行を記念して——
パネリスト：編集委員長 長尾 伸一 (名古屋大学名誉教授)
執筆者 田邊 玲子 (京都大学名誉教授)・鳥山 祐介 (東京大学)
岩佐 愛 (武蔵大学)・安藤 裕介 (立教大学)
久野 陽一 (青山学院大学)・増田 都希 (一橋大学)
司会： 上野 大樹 (慶應義塾大学)
- 15:20-15:40 休憩
- 15:40-17:30 開催校企画 Maria Pia Donato (Directrice de recherche, CNRS)
« La Révolution des archives. Histoire, mémoire et identités politiques dans
l'Europe révolutionnaire et napoléonienne » 【* オンライン配信あり】
司会：隠岐さや香 (東京大学) 言語：フランス語・通訳あり
- 17:30-18:00 連絡・移動
- 18:00-21:00 懇親会

6月18日(日)

10:00-10:50 自由論題報告(3) 榊原 知樹(東京医療保健大学)

「ロバート・バートンにおけるメランコリーの治療とテキストの異種混濁性」
司会：福本 幸之(龍谷大学)

10:50-11:00 休憩

11:00-11:50 自由論題報告(4) 蓮子 雄太(早稲田大学大学院)

「ラ・メトリーにおける「裁判は医師が行うべき」という思想」
司会：川村 文重(慶應義塾大学)

12:00-13:30 総会(昼食)

13:30-14:20 自由論題報告(5) 堀田 誠三(福山市立大学名誉教授)

「『啓蒙のユートピアと改革』再訪」
司会：長尾 伸一(名古屋大学名誉教授)

14:20-14:30 休憩

14:30-17:00 共通論題 「18世紀の西洋舞台芸術における人種・身体・血」

【*オンライン配信あり】

14:30-14:40 趣旨説明 大崎 さやの(東京藝術大学)

14:40-17:00 第1報告 森 佳子(早稲田大学)

「ラモー《優雅なインド諸国》を巡って
—18世紀のオペラ・バレと「異人種」の音楽—」

第2報告 大崎 さやの(東京藝術大学)

「ゴルドーニと被征服民—南米を扱った二作品を例に—」

第3報告 横山 義志(静岡県舞台芸術センター)

「俳優の家系はなぜ途絶えたのか
—18世紀フランス演劇における「生まれ」と「自然」—」

第4報告 京谷 啓徳(学習院大学)

「活人画(タブロー・ヴィヴァン)における身体」

懇親会について

場所：東京大学山上会館

〒113-8654 東京都文京区本郷 7-3-1（東京大学本郷キャンパス構内）

アクセスマップは下記の申し込み用 URL をご覧ください

立食方式

参加費：賛助会員・A 会員 6000 円

B 会員のうち非常勤の方 3000 円

B 会員のうち学生および退職者の方 2000 円

購入期限は 6 月 16 日（金）深夜です。当日会場でのお支払いはご遠慮下さい。

申し込み用 URL: <https://jsecs45.peatix.com>

注意事項：出席を希望される方はお手数ですが**上記リンクより該当する懇親会費チケットを事前にご購入ください**。なお、お申し込みが上限人数に達した場合、受付を締め切らせていただく場合があります。ご了承下さい。

第 1 日 6 月 17 日 10:10-11:00

会場：東京大学 国際学術総合研究棟内文学部 3 番大教室

自由論題報告 (1)

博物学者の猫論争—長い 18 世紀のフランスにおける動物・感情・文明—

貝原 伴寛 (日本学術振興会特別研究員 (PD))

司会：坂倉 裕治 (早稲田大学)

ペットの飼育が普及した現代社会において、動物の中でも犬と猫は特別な地位を占め、人々に親しまれている。ペット文化の歴史はキース・トマスの『人間と自然界』以来、盛んな議論の対象となってきた。ペットを都市化と産業化が進んだ近代に固有の存在と見なすトマスの見方は、古代史家・中世史家から批判を受け、現在では飼育動物に愛着を抱くことは、もっと普遍的な現象だと考えられている。以上の論争を踏まえ本報告では、研究史において見逃されてきた一点に注目して、ペット文化の近代に固有な形態を見定めることを狙う。すなわち、犬だけでなく猫も愛情の対象とする動物観である。

中世初期より鼠対策の役畜として西洋に普及した猫は、希少性の低さから珍重されることが少なく、愛玩動物として意識され難かった。また、しつけが比較的容易で、規律と忠節の象徴とされた犬と違い、猫は本能的で自立的な動物と見なされ、自由と無秩序の象徴とされた。したがって飼い主と猫との親密な関係が表象されることは極めて例外的であった。17 世紀末から 19 世紀初頭にかけての「長い 18 世紀」は以上の表象伝統が大きく揺らぎ、フランス博物学においては猫の本性をめぐる一つの論争が生じるに至った。

啓蒙期を代表する論者ビュフォンは、家畜と野生動物の違いを理論化するにあたって、人間に懐き、人為的な操作を受け入れて本性を変え得るという「改善可能性」を重視した。彼は猫を、人家に住んで鼠を捕る役畜でありながら、飼い主に対する愛着を抱かず、しつけが効かない点で野生状態に留まる「準家畜」とし、猫を愛玩する行為を逸脱として批判した。この主張は、19 世紀初頭の著名な博物学者ソニーニとフレデリック・キュヴィエによる批判を受けた。両者はそれぞれの立場から、猫もまた愛情能力を有し、人間のもとで柔らかな性格を獲得し「文明」に参与する動物であるとした。つまりビュフォンの理論的基礎を受け継ぎながら、猫を、愛情能力と改善可能性を有する「家畜」とし、人間の世話と情愛に値する存在として認めたのである。

18 世紀以後、元来は鼠対策の役畜として認知されていた猫までもが愛玩動物へと役割を変化させたのは、単に経済状況の改善により実益に資さない動物を飼育することが可能になったからではなく、啓蒙期に普及した「文明」の言説によって、人と猫の関係が規定しなおされたからだと考えられる。

第 1 日 6 月 17 日 11:10-12:00

会場：東京大学 国際学術総合研究棟内文学部 3 番大教室

自由論題報告 (2)

「聞き手」としてのルソー—『エミール』第 5 篇における対話の問題—

源川 まり子 (慶應義塾大学大学院)

司会：菅原 百合絵 (京都大学)

フェミニズム、特にケアの倫理において、他者の声を聞きとめることはそれ自体がケアの一部として考えられてきた。そうした議論を下敷きとしつつ、本報告では聞かれなかった声の存在を古典のなかに見出す試みとして「聞き手」としての思想家のあり方に注目する。

議論の中心に据えたいのは『エミール』を中心とするルソーの著作である。第 5 篇でソフィーについて語る教師 (ルソー) が女性の自然本性を規定しつつ、身体的・機能的な差異を社会的関係性に結びつけて論じたことに対してはフェミニストによる激しい批判がなされてきた一方、同時代的な先進性、または強者と弱者の絶えざる反転を主張した点などを理由に再評価も行われてきた。ルソーにとって男女の関係は相互補完的であり、両者は主体としての完全性を保ちつつも相互に埋める場所をもつ他者同士であるがゆえに、調和的な秩序が形成される。しかし『エミール』におけるソフィーと教師との会話の欠如は、物語の構造を鑑みても、またエミールと教師の関係と比較しても、際立っているように思われる。教師との関係性のなかでソフィーの言葉はほとんど直接的に描写されず、対話による真実の聞き取りが暗示されるシーンにおいてすらそれは変わることがない。このことをルソーが女性の自然的な性向として嘘や偽りを捉えていた点と関連づけて眺めたとき、女性の内的な意志や感情の真偽を問題にすることなく、嘘を女性に特有の言語として捉えた結果としての男女の関係性、そしてそこに潜む権力構造を改めて考えざるを得ない。発話内容やふるまいの真実性が常に揺らぎをもって捉えられるとき、完全性を保った存在であったはずの女性は意志を表出する手段を失い、主体としての声を失ってしまう。ルソーが他者から聞き取った声を自らの解釈に従って変容させ続けたことは晩年の著作でも省みられているが、男女の関係を軸に「聞き手」としてのルソーを捉えると、相互補完的な関係性という議論の瓦解へと連続していくようにも思われる。これらの論点を提示することで、18 世紀に女性がいかなる理由で他者として捉えられていたのかを問いながら、ルソーの著作における女性という存在を改めて検討しつつ、フェミニズム理論を基盤とした正典再読を行う可能性の一端を提示したい。

第 1 日 6 月 17 日 13:30-15:20

会場：東京大学 国際学術総合研究棟内文学部 3 番大教室

学会企画趣旨説明

「啓蒙を書く、啓蒙を編む」——『啓蒙思想の百科事典』刊行を記念して——

パネリスト：『啓蒙思想の百科事典』編集委員長 長尾 伸一（名古屋大学名誉教授）

執筆者 田邊 玲子（京都大学名誉教授）・鳥山 祐介（東京大学）

岩佐 愛（武蔵大学）・安藤 裕介（立教大学）

久野 陽一（青山学院大学）・増田 都希（一橋大学）

司会：上野 大樹（慶應義塾大学）

『啓蒙思想の百科事典』が 2023 年 2 月に刊行された。約 270 項目を擁する事典であり、日本 18 世紀学会会員を中心とする約 200 名が項目執筆に加わった、国内では初の「啓蒙思想」を主題とする「読む」中項目事典である。現代の研究の水準の最先端から啓蒙を叙述するにふさわしい視点と切り口を精選し、「啓蒙時代の知識と文化の全体を扱い、色とりどりの万華鏡のような、絢爛とした一大絵巻のようなその世界を描き出すことで、啓蒙の実像を示そう」（同事典「刊行にあたって」p.ii）とした事典である。

18 世紀および啓蒙の従来像をいかに継承し、深め、そしてまたあらたに切り拓いていくかを、学会内外の専門家の協力によって、パノラマとして提供しようとした本事典は、日本 18 世紀学会にふさわしく、多彩で広汎な国際的・学際的地平へと啓蒙の世界を開くものである。同事典の刊行を記念する本イベントでは、編集委員長の任に当たられた長尾伸一会員と、事典の項目・コラム執筆者にご登壇いただき、ご自身が寄稿した項目・コラムについてそれぞれにご紹介いただく。

ご登壇いただくのは、地理的にも学術的にも多様な領域に及ぶ、本事典のフロンティアをなすような新鮮で意欲的な項目・コラムの執筆者の方々である。それぞれ、「ジェンダー」（田邊）、「ロシアの啓蒙」（鳥山）、「オラトリオ」（岩佐）、「王立協会と科学アカデミー」（小風）、「黒人のナラティブ」（久野）、「奢侈論争」（安藤）、「マナー／マナーズ」（増田）を担当されている。

執筆にお加わりいただいたこれら会員によるご発表を通じて、フロアの会員の皆さまとともに、本事典を通じてあらたに緩やかに編まれた多面的な啓蒙研究の過去と現在、未来について語り合う機会をつくることができれば幸いである。会場にお集まりいただいた会員諸氏の自由で闊達な議論も期待している。

『啓蒙思想の百科事典』編集担当幹事
（上野大樹・小田部胤久・武田将明・長尾伸一・逸見龍生）

第 1 日 6 月 17 日 15:40-17:30

会場：東京大学 国際学術総合研究棟内文学部 3 番大教室

開催校企画趣旨説明

アーカイブの革命—革命期及びナポレオン帝政期ヨーロッパにおける

歴史・記憶と政治的アイデンティティ—

(La Révolution des archives. Histoire, mémoire et identités politiques dans l'Europe révolutionnaire et napoléonienne)

講演者：マリア・ピア・ドナート (Maria Pia Donato)

(フランス国立科学センター(Directrice de recherche CNRS))

司会：隠岐さや香 (東京大学)

フランスは歴史的な記録を体系的に保存した文書館あるいはアーカイブ (archives) の整備で知られる。とりわけパリのスービーズ館に集められた資料群は国立古文書館 (Archives Nationales) を形成し、歴史研究者にはその恩恵を被ってきた人も多いただろう。その豊かなコレクションは、ヨーロッパの歴史的記憶および政治的アイデンティティを形作ってきたものともいえる。だが、そのコレクションの由来について、私たちはどれだけ知っていたのだろうか。マリア・ピア・ドナート氏の近著『世界のアーカイブ——ナポレオンが歴史を篡奪したとき』(イタリア語初版 2019 年、フランス語訳 2020 年) によれば、アーカイブは従来、文化的・知的な使命を持つだけでなく、高度に政治的な目的を有していた。そして、各国から集められたフランスの豊かなアーカイブコレクションは、ナポレオン軍による侵略と占領地での文書没収という、まさに記憶の篡奪および支配の上にその基礎が築かれた側面もあるという。本講演では同書の内容を踏まえつつ、フランス革命期とナポレオン帝政期にかけての欧州でのアーカイブ形成過程についてお話頂く。世界中の記録を収集するという野望の上に作られた近代国家のアーカイブは、人々の過去に対する関係を変貌させた。また、20 世紀以降は社会情勢や情報技術の発展にともない、アーカイブは政治から文化へとその役割を移しつつあり、それが各地で新しい課題をもたらしてもいる。本講演がアーカイブの歴史と使命について広く考察する機会となれば幸いである。

第 2 日 6 月 18 日 10:00-10:50

会場：東京大学 国際学術総合研究棟内文学部 3 番大教室

自由論題報告 (3)

ロバート・バートンにおけるメランコリーの治療とテキストの異種混淆性

榊原 知樹 (東京医療保健大学)

司会：福本 幸之 (龍谷大学)

17 世紀イギリスのロバート・バートン (1577-1640) が著した『メランコリーの解剖』(*The Anatomy of Melancholy*, 初版 1621 年) は、メランコリー (憂鬱症) という心の病をあらゆる視点から論じた大著である。この作品は憂鬱症を患っていた文豪サミュエル・ジョンソンに愛読され、ローレンス・スターンやジョナサン・スウィフトなど 18 世紀文学にも重要な影響を与えた。

メランコリーの病因は長らくガレノスの四体液説で説明され、その治療は医師の領域とされていた。『メランコリーの解剖』を読者の精神に直接作用するセラピー的なテキストとして読み解こうとする試みは Lund (2012) らにより進められてきたが、膨大な数の引用や借用を散りばめる執筆形態をメランコリーの治療と関連づけて考察する論考はこれまで見られなかった。

本発表では、医書の体裁をとりながら無数の引用や借用をパッチワーク状に織り上げる執筆技巧と、メランコリーの治療に関するバートンの思想の間に認められる相関性について考察する。『メランコリーの解剖』のテキストは、古典古代から中世、ルネサンス期にいたるまでの幅広い時代と、医学、神学、宗教、哲学、歴史、地理学、天文学、気象学にまで多岐にわたる領域の数多くの作品を切り刻んだ断片を取り込んで書かれている。取り込む形態も引用や借用、パラフレーズから翻訳、翻案、要約と様々で、英語とラテン語の往復も小刻みに起こる。

このようなテキストの特異性にセラピー的特質を見出すことはできないだろうか。バートンによれば、メランコリーの主因は、眼前に存在しないイメージを精神に想起させる想像力の機能が不調をきたし、精神が自己閉鎖的な悪循環に陥ることにある。『メランコリーの解剖』のテキストを詳細に分析すると、読者に知識空間の圧倒的な多様性を絶えず感知させるような執筆技巧には、想像力の振る舞いをいかにコントロール下に置くかという治療指針との相関性が認められる。本発表では、親しみやすい口調による語りかけで読者を牽引しながら、異種混淆的なテキストで次々と断片を繰り出し、読者に四方八方から揺さぶりをかけるバートンの文体の諸要素が、メランコリーの治療をめぐるバートンの思想と整合している様相を描き出したい。

第 2 日 6 月 18 日 11:00-11:50

会場：東京大学 国際学術総合研究棟内文学部 3 番大教室

自由論題報告 (4)

ラ・メトリーにおける「裁判は医師が行うべき」という思想

蓮子 雄太 (早稲田大学大学院)

司会：川村 文重 (慶應義塾大学)

18 世紀フランスの医師で哲学者のラ・メトリーは「人間は機械である」と述べた。また彼は現代においても注目され、たとえば 2002 年にイギリスの『神経科学史雑誌』に掲載された論文「ジュリアン・オフレイ・ド・ラ・メトリー (1709-1751)」は、2001 年が彼の没後 250 周年となった事を踏まえ、「ラ・メトリーが成した神経科学への寄与を記念」し、また「彼の洞察は多くの点で時代の先を行き、現在の進化論的神経科学が示すジレンマや懸念を予見していた」と述べて、こうした「ジレンマ」の一例として、「すべてが物質的であるならば、私たちはみずからの行為に責任があると見なされるのか」という問いを挙げている。

そこで本発表は、この『神経科学史雑誌』の記事が少し触れている、「裁判は医師が行うべき」というラ・メトリーの思想を掘り下げる。というのも彼のこの思想は複数の理由に基づいており、また著作毎に変化するからである。

ラ・メトリーは『人間機械論』(1747 年初版)でこの思想を述べ、その理由として、「犯罪者が自分では少しも意識しなかった悪事」があり、「理性が異常なあるいは逆上した感覚にとらわれている時」には「理性が感覚を支配する事」ができず、医師のみがそうしたケースを見分けられるという事を挙げる。また二つ目の理由は、そうした「犯罪者」が「我に帰った時」に強く良心の呵責を感じ、「良心の呵責でもって十分に罰せられている」という事である。さらに三つ目の理由は、そのように「十分に罰せられている」はずの「犯罪者」に、裁判官たちが火あぶり等の不当に重い罰を科してきたという事である。

このうち本発表で特に着目したいのは二つ目の理由である。というのもラ・メトリーは、『人間機械論』より後の著作『幸福論』(1748 年初版)になると、良心の呵責は教育により吹き込まれるもので、「犯罪者」が幸福になるために捨て去ると良いものだと考えるようになるからだ。つまりラ・メトリーは、「犯罪者が良心の呵責で十分に罰されている」事を理由の一つとする「裁判は医師が行うべき」という思想から、「犯罪者は良心の呵責を捨てて幸福になるべき」という思想へ移ったのである。

また本発表の終わりには、19 世紀後半に人種主義的決定論を唱えた生理学者ジュール・スーリイによって賞賛された、実際のものとは異なる「ラ・メトリー思想」を概観する事で、実際のラ・メトリーの思想を本発表で掘り下げた事の意義を示したい。

第 2 日 6 月 18 日 13:00-13:50

会場：東京大学 国際学術総合研究棟内文学部 3 番大教室

自由論題報告 (5)

『啓蒙のユートピアと改革』再訪

堀田 誠三 (福山市立大学名誉教授)

司会：長尾 伸一 (名古屋大学名誉教授)

今年 1 月に刊行された『啓蒙思想の百科事典』に、ヴェントゥーリ (1914-1994) の『啓蒙のユートピアと改革』にかんする項目を書く機会をあたえられた。これをきっかけに、それまで加藤・水田訳の日本語版 (1981 年) とその底本である英語版 (1971 年) しか読んでいなかったことを反省して、イタリア語版 (1970 年) とあわせ関係文献を読みひろげていった。その成果をヴェントゥーリの項目に反映させるようにつとめたけれども、そこに盛りこむことのできなかった知見や文献について、また項目の執筆以降の調査の結果もふくめて、ここで報告したい。

当該の項目は短いものであるが、「方法と視角」「啓蒙の政治史」「共和主義と理神論」「啓蒙と共産主義」「啓蒙の意志」という小見出しで内容の見通しができるという編集上の工夫がなされている。「方法と視角」で、ヴェントゥーリの方法について、思想史の叙述において用語の概念的説明をおこなわず、「事実による批判」を提示するものである、とわたくしは主張した。しかし、この点については、水田洋 (1919-2023) がすでに『イタリア歴史評論』のヴェントゥーリ追悼号 (1996 年) において指摘している。

ヴェントゥーリは、また『19 世紀ヨーロッパ史』(1932 年) を「自由の宗教」の具現化の過程ととらえるクローチェ (1866-1952) の歴史把握を承認しつつ、19 世紀史における社会主義・共産主義の重要性を強調する。ヴェントゥーリは『ロシア人民主義』(1952 年、2 版 1972 年) の著者でもあった。「自由」にくわえて「平等」への要請が啓蒙の特質であり、ヴェントゥーリにとって、社会主義・共産主義は啓蒙の不可欠の要素となる。

「共和主義と理神論」を「啓蒙と共産主義」へつなぐ思想家としてはトーランドが主役であるが、もうひとり理神論から共産主義へという軌跡をえがいたピエモンテの貴族ラディカーティ (1698-1737) をあげておきたい。ヴェントゥーリにはラディカーティを主題とした著書 (1954 年) があり、ヴェントゥーリによればラディカーティは、自分のものと他人のものとの区別がなく平等が実現された共産主義の社会に「完全な民主主義」を見たのであった。

以上に加えて、イタリア語版と英語版の異同の検討をおこない、日本語版をふくむ三つの版本について、それぞれの特徴をも紹介する。

第 2 日 6 月 18 日 14:30-17:00

会場：東京大学 国際学術総合研究棟内文学部 3 番大教室

共通論題 趣旨説明

18 世紀の西洋舞台芸術における人種・身体・血

大崎 さやの (東京藝術大学)

18 世紀のヨーロッパでは、ガランによる『千夜一夜物語』のフランス語訳 (1704-1707) の空前のブームなどもあり、異郷がテーマの作品が数多く上演された。たとえばオペラの分野を見てみると、1735 年パリ初演のフェズリエ台本、ラモー作曲のオペラ・バレ《優雅なインド諸国》には、トルコ人やインカ人、ネイティヴ・アメリカンが登場する。また演劇でも、イタリアの劇作家ゴルドーニが 1754 年にヴェネツィアで初演した悲喜劇『ペルーの娘』や翌年初演の『美しき野生の娘』には、南米の人々が登場する。異郷の人々の描写からは、ヨーロッパ人とは別の「人種」についての考えが浮かび上がってくる。

竹沢泰子・ジャン＝フレデリック・ショブ編『人種主義と反人種主義』(京都大学学術出版会、2022 年)の序論によると、「人種」に生物学的実体はない。現在の人種研究においては、「人種」とは、近代において、肌の色などの身体形質をもとに分類され、能力や気質なども共有するとみなされた、社会的に構築された集団と捕らえるのが一般的」とされる。人間の分類を最初に試みたのは、17 世紀のフランス人、フランソワ・ベルニエ(François Bernier, 1620-1688)で、彼が「race」という言葉を、家族や系譜といった意味ではなく、現在考えられている意味で最初に使ったとされる(平野千果子『人種主義の歴史』、岩波新書、2022 年)。さらに啓蒙主義の時代になると、科学の精神に従って世界を分類する試みが盛んとなり、カール・リンネ(Carl Linné, 1707-1778)は『自然の体系』(*Systema Naturae*, 1735)で人類をアメリカ人、アジア人、ヨーロッパ人、アフリカ人の四つに分類した。

人間は身体的な特徴によってカテゴライズされるようになっていった訳だが、一方で竹澤も述べるように、ユダヤ人のように、「身体形質が不可視ながらも歴史的に人種化されてきた集団」も存在した。俳優もそのような集団に属すると言えるかもしれない。たとえばフランスでは 1673 年のモリエールの死以降、俳優に対する教会からの破門が厳密に適用されるようになり、俳優は終油や結婚の秘跡も受けられなくなった。それまで「血」のつながりによるファミリービジネスとして成立することも多かった俳優業であるが、こうして 18 世紀には俳優の家系が断絶していく。そしてブームとなった社交演劇出身の俳優が増えていった。

社交演劇ブームのなか、通常の演劇と違い、静止した「身体」を使う活人画も、上流階級の間でプロフェッショナルではない素人たちにより盛んに上演された。ゲーテも活人画を好み、『親和力』で活人画上演の様子を描いている。動きや声といった要素のない、生身の「身体」を活かす形での芸術である。

以上、この共通論題では、「人種・身体・血」をキーワードに、18 世紀の西洋における舞台芸術と人間との関わりを、多面的に読み解いていきたい。

共通論題 報告 (1)

ラモー 《優雅なインド諸国》を巡って—18 世紀のオペラ・バレと「異人種」の音楽—

森 佳子 (早稲田大学)

1735 年に初演されたラモー (Jean-Philippe Rameau) の《優雅なインド諸国 Les indes galantes》(フズリエ台本) は、オペラ・バレの第一作目 (全部で 5 作あり) として知られる。このオペラ・バレとは、カンプラによって創始され、ムレ、モンテクレールに受け継がれたジャンルで、寓話的なプロローグと複数のアントレ (それぞれで物語が完結するオムニバス形式) で構成される。また、しばしばロココ芸術やワトーの絵と比較され、フランスの伝統的なバレ・ド・クールとオペラを融合したようなもの、と評されることもある。《優雅なインド諸国》の場合、プロローグと 4 つのアントレ「寛大なトルコ人」「ペルーのインカ人」「ペルシアの花々」「野蛮人たち」で成り立ち、エキゾチックな作品となっている。『百科全書』によれば、タイトルの「インド Indes」は南アジアだけでなく、幅広くアメリカ方面までを指す場合があり、遠い異国を指す曖昧な用語でもあったと言える。本発表では特に、北アメリカのネイティブ・アメリカンを扱った第 4 アントレ「野蛮人たち Les sauvages」を例に、ヨーロッパ人にとっての「異人種」の音楽がどのように表現され、受容されたのかについて考察する。

「野蛮人たち」は、1736 年の再演で付け加えられたアントレで、そのおかげで上演は成功したと言われる。物語は北アメリカを舞台に、原住民の恋人同士であるジマとアダリオが、フランスとスペインからやって来た二人の侵略者の邪魔をかわし、結ばれる、といったものだ。このアントレのラストに挿入される「平和のパイプのダンス」は、1725 年にテアトル・イタリアン (コメディ・イタリエンヌ) で上演された、ルイジアナから来た二人の原住民のダンスと関係している。この公演に関する記録は「メルキュール・ド・フランス」で確認でき、なるべく実際のダンスに忠実に展開されたと考えられる。しかも、1704 年に出版されたラオンタン (Lahontan) の旅行記、あるいは 1724 年のラフィット (Lafitau) のそれには、「平和のパイプのダンス」を実際に見た体験が記録されており、当時の人々の間に、民族的な知識がある程度広まっていたことが窺える。

ラモーは 1728 年に、このダンスにインスピレーションを得たクラヴサンの作品を書き、それをオペラ・バレの「野蛮人たち」に転用した。当時の批評には「音楽は本当にインディアン的」、あるいは「ゴツゴツ、ザラザラしている」などと書かれている。しかし実際に音楽を聴いてみると、むしろ、原住民の音楽を詳細に模倣しているわけではない。

啓蒙思想の時代に入ると、模倣芸術においては「真実らしさ」が重視され、オペラに特徴的な「驚異・非現実 Merveilleux」は忌避される傾向が現れる。そうした流れにおいて、《優雅なインド諸国》に見られるエキゾチズムは、単に見知らぬ国の「非現実」や「空想の世界」を表している訳ではない。ここで原住民のダンスと音楽は、ラモーの音楽語法によって 18 世紀的な「真実らしさ」と融合し、遠い異国で現実に存在すると考えられた、「ユートピアの世界」を表現している可能性がある。

共通論題 報告 (2)

ゴルドーニと被征服民—南米を扱った二作品を例に—

大崎 さやの (東京藝術大学)

18 世紀ヴェネツィア生まれの劇作家ゴルドーニは、イタリア演劇の改革者として知られる。彼の改革前、イタリア喜劇は主にコンメディア・デッラルテの即興喜劇であったが、それは予め決まった登場人物、すなわち類型的登場人物による喜劇であった。これらの類型人物は、たとえばパンタローネはヴェネツィア出身、トゥルッフアルディーノ (アルレッキーノ) はベルガモ出身、ドットーレはボローニャ出身といったように、出身地が決まっている登場人物もいた。またパンタローネはヴェネツィア方言、トゥルッフアルディーノはベルガモ方言と、話す言葉もそれぞれの出身地の言葉となっていた。上演に際して、俳優は筋書きに沿って自分の演じる登場人物の性格にふさわしいような台詞を考えて即興で演じた。ゴルドーニは、漸次的改革により、台詞が全て書かれた喜劇を俳優に演じさせて、類型を脱した、より自然な登場人物を作り出した。

しかし彼は一方で、たとえば 1748 年の『抜目のない未亡人』(*La vedova scaltra*)では、イギリス、フランス、スペイン、イタリアといった、各地の「典型的な」登場人物を創造していった。このことにはナショナリズムが形成されつつあったという時代背景があるが、同時にゴルドーニはイタリア内に限られていた類型的登場人物から、今度はヨーロッパ各地の類型的登場人物を作り出していったとも言える。彼はオペラではすでに『スウェーデン王グスタフ一世』(*Gustavo primo re di Svezia*, 1740)のような作品で異邦人を描いており、『スキタイの王オロンテ』(*Oronte re de' Sciti*, 1740)ではさらに広く、ヨーロッパ外の異邦人を扱っている。

ゴルドーニがヨーロッパ外の異邦人を登場させた作品は、18 世紀ヴェネツィアの劇場の台詞劇上演では最大のヒット作となった悲喜劇『ペルシアの花嫁』(*La sposa persiana*, 1753)のように、他にも複数存在する。その中でも、今回は特に、フランスのグラフィニー夫人のベストセラー小説『ペルー娘の手紙』(*Lettres d'une Péruvienne*, 1747)の翻案悲喜劇『ペルーの娘』(*La peruviana*, 1757)、そして南米ギアナが舞台の悲喜劇『美しき野生の娘』(*La bella selvaggia*, 1758)の二作を取り上げる。これらの作品には、アジア等の他の地域を扱った「異邦人もの」とは大きく異なり、ヨーロッパ人と南米の人々、すなわち征服者と被征服者が登場する。ヨーロッパ人の征服により奴隷の身分に転落させられたアメリカ人——ゴルドーニはインディアン *Indiani* や東洋人 *Orientali* とも呼んでいる——は、古代ギリシアのアリストテレスの先天的奴隷説 (『政治学』) に基づき、奴隷になるべく生まれたとされ、征服は正当化された。ゴルドーニの二作品には、ヨーロッパ人がアメリカ人に向けた差別的な視線が見られる一方で、異世界への憧れも見て取れる。

本発表では、両作における人種、身体、そして血の問題を検討しつつ、ゴルドーニ作品における被征服民について考えたい。同時にゴルドーニ作品の登場人物における「類型」についても論じたい。

共通論題 報告 (3)

俳優の家系はなぜ途絶えたのか—18 世紀フランス演劇における「生まれ」と「自然」—

横山 義志 (静岡県舞台芸術センター)

歌舞伎や能の歴史においては家系が重要な意味をもってきたが、フランスにはそれに匹敵するほどの俳優の家系は見当たらない。フランス演劇において俳優の家系が途絶えていった背景には、17 世紀から 18 世紀にかけてのいくつかの構造的変化がある。これらの変化は「自然な演技」という概念の成立とも関わっている。

フランス芸能史においても中世以来、家庭のなかで芸が伝承されてきたケースは少なくない。17 世紀後半のパリの演劇界においては、アルマンド・ベジャールやバロンをはじめ、俳優の親のもとに生まれた俳優が多く活躍し、「俳優の家系」が成立する萌芽が見られた。ドービニャック師は『フランス演劇の再建試案』(1641 頃執筆)で、「礼節を保つために、劇団内に父か母がいなければ、[未婚の] 娘は舞台に上ってはならない」としている。風紀上の理由からも、女優は親が劇団内にいる方が望ましいと考えられていたわけである。また、バロンが「俳優は王妃の膝の上で育てられなければならない」と言ったように、自然に宮廷作法を身につけるためにも、俳優一家に育つことで幼い頃から宮廷人と交際することは重要だった。

しかし 18 世紀になると、ルクヴルール、デュメニル、クレロン、ルカン、タルマなど、歴史に名を残した名優の多くは俳優ではない親のもとに生まれている。そして二世俳優の演技には厳しい目が向けられるようになっていった。ディドロ『私生児対話』(1757)では、兄弟姉妹 4 人がコメディ=フランセーズに入ったキノ一家など、1740 年代まで活躍していた二世俳優たちが、凡庸で品行の悪い俳優の例として挙げられている。1760 年代には、コメディ=フランセーズの座員のほとんどは俳優一家の出身ではなくなっていた。

俳優の家系が断絶した最大の要因は、1673 年のモリエールの死を境に、パリ大司教区において俳優の破門が厳格に適用されるようになったことである。これによって俳優は終油の秘跡のみならず、結婚の秘跡も受けることが公式には不可能になり、子への相続も困難となる。ルイ 14 世はマントノン夫人の影響で演劇に対して冷淡になっていき、演劇人は宮廷に出入りできなくなっていく。一方で 18 世紀になると、サロンなど小さな空間で行われる社交演劇が隆盛し、貴族とブルジョワが職業俳優とともに舞台に上がる機会も多くなる。ここではコレギウムにおける演劇教育が共通の基盤となる。そのなかで、ルクヴルール、ルカン、タルマのように社交演劇出身の俳優が、より「自然」な演技形式を形成していく。

コレギウムで広く読まれたキケロ『弁論家について』において、natura (羅) という語は

(1) 生まれながらの性質、(2) 弁論の内容や形式、(3) 人間の身体を機能させている自然のシステムといった意味をもっている。上記の構造的変化のなかで、(1) が重視されなくなる一方で、(2) と (3) を有機的に接合する感情主義的演技論が発展し、そこで形成されるものが「自然さ [仏:naturel]」と呼ばれるようになる。この新たな自然概念は出自による差異よりむしろ人間の相同性に焦点を移行させ、革命期に向けて脱階級的な演技観を形成するものとなっていく。

共通論題 報告 (4)

活人画 (タブロー・ヴィヴァン) における身体

京谷 啓徳 (学習院大学)

活人画 (タブロー・ヴィヴァン) とは、衣装を着けた複数の人間が、よく知られた絵画や歴史・物語場面を不動のポーズによって再現するパフォーマンスのことである。18~19 世紀前半に上流階級の集会や夜会の余興としてもはやされた。絵画を再現するとはいっても、背景・小道具等は省略されることもあり、あくまでも演者の身体が主役である。活人画には一般的な演劇のようなセリフや動作はなく、観客は静止した演者の身体を凝視することになる。

プロフェッショナルの役者による演劇と異なって、当初上流階級の人々の遊びであった活人画では、演者は素人である。活人画は見る側も見られる側も同じ上流階級に人々であり、そこでは誰が演じているのかということが重要であった。とりわけ上流階級の女性の身体をまじまじと凝視するという事は、日常にあっては不躰なふるまいであるが、活人画はその行為を正当化する装置であったということもできる。

活人画の初期の記録としては、フリードリヒ・メルヒオール・フォン・グリムが、彼の編集していた冊子『文芸通信』に掲載されたドゥニ・ディドロの「サロン評」に付言する形で、かつて田舎で上流階級の人々が活人画をしていた様子を述懐している (1765 年)。ヨハン・ウォルフガング・フォン・ゲーテの小説『親和力』(1809 年) には、上流階級の人々が活人画に打ち興じる様子が生き生きと描かれているが、実際この小説は、ゲーテの名声とともに活人画の普及に一役買うことになった。またウィーン会議 (1814 年) においても度々活人画の夕べがもたれ、活人画はその参加者たちによって、ロシアや東欧を含むヨーロッパ各地に流布していった。

活人画は、演じる側にとっては、絵に描かれた衣裳を身にまとい役を演じる、いってみれば現代のコスプレのような楽しみがあった。観客の側に回った場合、活人画はその主題や原画についての議論をする等、教養を共有する上流階級の人々の知的な遊びだった。上流階級の娯楽としての活人画は、上演の当日だけでなく、その準備も含めての楽しみだったものと思われる。複製版画を眺めつつ皆で題材を探し、それにふさわしい衣裳を取り揃え、身振りや表情をあれこれ研究してといったことをひっくるめての、高尚な暇つぶしだったのだ。西洋絵画ではいわゆる歴史画がヒエラルキーの頂点に位置し、そうであれば活人画も複数の人物像からなる歴史画を題材とすることが多かった。活人画は、自らの身体で画家たちが創造した美しい立ち姿や複雑なポーズを模倣する、困難かつやりがいのある遊びだったことだろう。

たとえばフランスで行われた活人画の題材となったのは、ニコラ・プッサンやジャン＝バティスト・グルーズ、ジャック＝ルイ・ダヴィッドなど、サロンで評判になったフランス人画家の作品が多かった。彼らの描いた歴史画には、(とりわけ神話が主題となっている場合) 裸体が登場するが、裸体人物の部分は周到にカットすることもあったようである。一方、19 世紀に入り、第二帝政の時期になると、活人画は女性裸体を眺めるための言い訳としても重宝されることになった。主にそのような目的から、活人画はいずれショービジネスの世界にも舞台を広げていくことになるのだ。